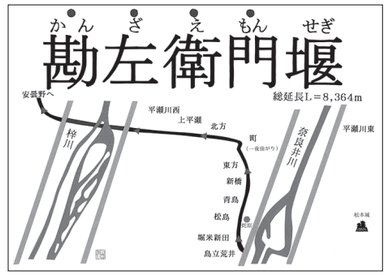
勘左衛門堰



制作　島内地区町会連合会
脚本　胡桃孝好
切り絵　青木昭博・礫石和美・
松澤好美・二村常義・清水祥二
編集　島内図書視聴覚委員会

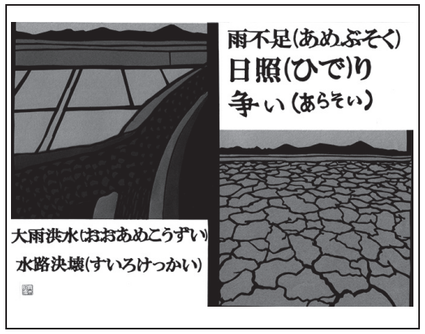
梓川や奈良井川が流れる島内は、
勘左衛門堰や拾ケ堰、島堰など
数多くの水路が流れる水の豊富な地域です。

しかし昔は、
水不足や大雨による洪水に悩まされ、水との
闘いを繰り返してきた歴史があります。

今日は数多い堰の中から、奈良井川の島立
で水を取り、

島内（松島、青島、新橋、東方、町、北方、
上平瀬、平瀬川西）をとおり、
梓川を横断して、安曇野へと流れる
勘左衛門堰について紹介しましょう。

演出ノート



川は、昔から田畑の灌漑や生活用水として利用され、暮らしに欠かせない働きをしてきました。

やがて土地の開発が進み、田畑が増えると、自然の川を利用するだけでは間に合わず、人工の堰や溜池が造られました。

しかし、日照りが続くと川は枯れて、堰や溜池の水は少なくなり、水の配分をめぐって争いがおきました。

反対に大雨が降ると、堤防や水路が壊れて、その修理におわれました。

このため人々は、絶えず堰の状況に気を配らなければならず、その苦労は大変なものでした。

演出ノート

さて、時は今から約四百年前、
時代は戦国時代から江戸時代へと移り、
人々は安定した食料を得るために、
水田の開発を進めました。
また松本藩のお殿様も、藩が豊かになる
水田開発に力を入れました。

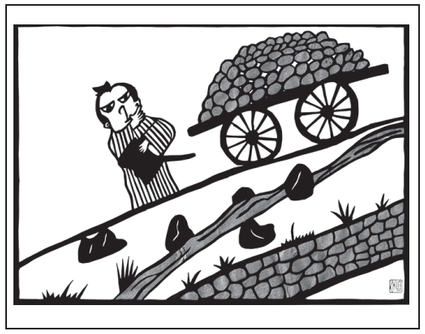
しかし、安曇の平は田んぼをつくりたくて
も水が少なく、開発は遅れていました。

勘左衛門堰が最初につくられたのは、
寛文二年(一六六二年)のことです。
安曇郡の飯田村と新田村の水が足りず、
梓川の水を利用して堰をつくり、
田を増やそうとしたのです。

演出ノート

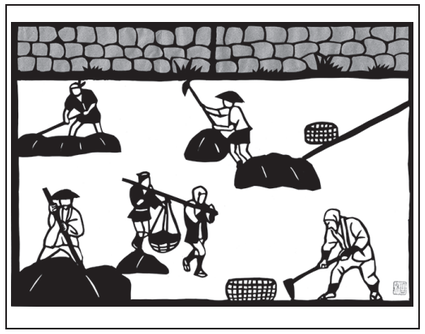
声を変えて

悲しそうに



この新しい堰を造る世話役が、松本藩の成相組代官・二木勘左衛門でした。 でも最初につくられた堰は、完成こそしましたが、流れる水の量が足りず、失敗に終わりました。 なぜなら、梓川には水量が多い時と少ない時があって、必要な水の量をいつでも確保することができなかったのです。 そこで勘左衛門は、水の豊富な奈良井川から水を引くことを思いついたのです。 そして二十三年後……	少し強調して 間を開けて

演出ノート



奈良井川の島立・小麦淵から水を取り、
島内をとおって、梓川を横断し、
下鳥羽まで水を引く堰の計画を立てました。

水は坂でないと流れませんので、どこを
どれくらい掘ったらよいのか測量したり、
水の代わりに豆を転がしてみるなど、
苦労をされたようです。

そして勘左衛門の計画を聞いたお殿様から
「これならいいだろう」と許しが出ました。

勘左衛門は先頭にたって働きました。
工事は、農民から人夫を集め、松本藩の足軽た
ちにも仕事をさせ、貞享二年(一六八五年)
三月に始まり、五月に完成しました。

演出ノート

しかし、完成した水路に水を流すと、
残念なことに、青島の蛇原というところで、
水が溢れ出てしまいました。

水がうまく流れなかった時には、切腹して
お詫びする覚悟をしていた勘左衛門は、

この時、静かに川のそばへ行き、
草の上に座って小刀を手に持ち、松本城の
方へ向かって深く頭を下げました。

居合わせた人々はしきりに止めましたが、

勘左衛門は、
「皆の衆、早く堰を直して、水が流れるよう
に頼み申したぞ」と言うが早いか、
腹に小刀を突き刺し死んでしまいました。

演出ノート

少し間をあけて

落ち着いた様子
できっぱりと

勘左衛門の最後の言葉を聞いた人々は、急いで堰の修理にとりかかりました。溢れた場所の上で水を止め、近くの家から畳や藁を借りて壊れたところをふさぎました。

そして再び水を流すと、今度は安曇の方までうまく流れていきました。

この堰ができたおかげで、水が足りなかった田に水をかけることができました。

また畑も田んぼに変わって、前よりお米がとれるようになったといいます。

（勘左衛門堰は、堰を造った二木勘左衛門の名前からとったと言われますが、当時は、「成相組の新堰」と呼ばれていました。）

演出ノート

少しトーンを落として

けれども、この新しい堰も、水路が長く、梓川を横断することから、砂がたまったり、水が流れなかったりして、しばらくすると使われなくなりました。

当時の梓川の横断は、横堀と言って、川原に杭を打ち、『そた』と呼ばれる木を渡し、土をかぶせてつくった水路でした。

このため、大雨が降るたびに横堀は流されてしまい、横堀をつくっては流されるの繰り返しが続き大変だったのです。

その後も、勘左衛門堰は、何度も改修工事が行われています。

演出ノート

享保十四年(一七二九年)には、
日照り続きで、稲が枯れそうになり、
お殿様は堰を造り直しましたが、うまくいきませんでした。

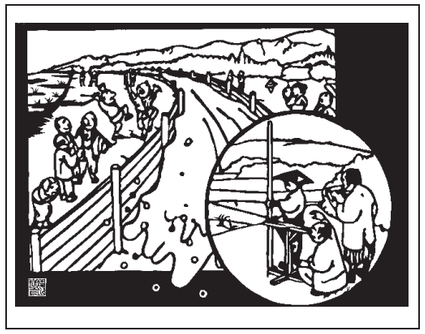
堰の周辺の村人達も立ちあがります。

天明二年(一七八二年)には、
島内や安曇の村々、あわせて十三の村の庄屋と組頭が代表となり、

お殿様に『奈良井川から梓川までの堰を直したい』との願いを出し、
延べ五万人を超える人数で改修工事をしています。

演出ノート

少し間をあけて



そして寛政十年(一七九八年)には、新たに下堀金村、吉野村・新田町村も加わって、堰は大きく造り変えられました。

工事は冬の二月に始まり、三月までの短い期間で完成しています。

この早い完成には、工事責任者の平倉六郎右衛門が、夜もろくに寝ずに小屋に泊まり込んで働いた努力や、寒い中を、みんなの生活がよくなるためならと、自分の仕事を後回しにし、お金ももらわずに働いた農民の苦労があったのです。

では現在の勘左衛門堰はどうなっているか、と言いますと、

演出ノート

ここから少し強調して

少し間をあけて

大水のたびに流された梓川の横堀は、大正時代に川の地下を通る底樋にかわり、

昭和六年には、コンクリートサイホンに改良され、流される心配がなくなりました。

また十分な水を確保するため、昭和二十八年に水の取入口が、小麦渕から三百メートル上流に移されました。

そして昭和五十四年から、延長八千三百六十四メートルの長い水路をコンクリート張にする改修が進められ、平成二年の取水する頭首工の完成まで、長い期間をかけて大きな工事が行われました。

演出ノート

こうして、現在の勘左衛門堰は、
途中で水漏れすることも無く、いつでも安定した水が流れるようになりました。

また堰の幅を縮めたことにより、堰の横に広い道路もつくられました。

人々の生活に利用され、守られてきた堰。
これからも、ゴミなどを捨てることなく、きれいな水が流れ、暮らしに役立つ堰であって欲しいと思います。

おしまい。

このお話は、平成八年に、
島内小学校四年生であった生徒の
社会科の資料をもとに作成したものです。

演出ノート

少し改まった調子で